

# 「私の教養教育雑感」 “My touch on the liberal arts course”

九州大学大学院・薬学研究院・創薬科学部門  
生体分子情報学講座・生体界面解析学分野

柴田 攻 (助教授)

キーワード：教養教育，入試制度，自主性，聴取，発言

keyword: education of the liberal arts course, entrance examination system, independence, hearing, speaking

## Abstract:

How is going an education of liberal arts course in the present universities? I have been concerned with the education of the liberal arts course, especially physical chemistry and basic chemistry of experiment, since last twenty years and more. I feel that recent students in general don't have independent mind for their student life. It might be related to the entrance examination system, especially “National Center for University Entrance Examinations”. Furthermore, from considering the part of deregulation by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the college of general education in Kyushu University also collapsed in 1994, and the education system for the liberal arts course was newly reconstituted. However, its educational system runs well or not? One of the important points for these matters was discussed here.

私は、過去二十数年間、教養教育における物理化学系の授業及び化学実験の分野を中心に携わってきた。そこで感じることは、自主性に欠ける学生が最近増えていることである。これは、大学進学者の増加という現況において、今日の日本の大学入試制度等に密接に関連していると言わざるを得ない。大学入学者選抜大学入試センター試験（センター試験）の導入により、多くの人々が指摘している様に高校教育と大学教育の間に歪みが生じていると私も考える。導入以前の高校では、昨今問題になっている必修科目の履修漏れ等は生じておらず（私は信じているが）、高校生には幅の広い教育がなされ、事柄によっては、理論立てて事にあたるという教育がなされていた感じがする。またその当時、学生数は今に比べて多かったが、教師・学生相互に余裕すらあった感じがする。センター試験の導入により、例えば、試験問題の解法過程が大切だという教育はお座なりになり、ただ答えさえ合っていれば結果オーライの風潮となってきた。これは手抜き入試の賜物で、入試制度そのもの及び大学側にも多いに責任がある。財政面及び時間をかけた今後の抜本的入試制度の改善が望まれる。更に追い打ちをかける様に、平成六年文部科学省の規制緩和の一環として、殆どの大学で教養部が廃止された。教養部廃止以前、全ての学生には人文学、社会科学、自然科学の各系を分け隔てなく履修する機会が設けられており、そこでは哲学・倫理が教養の前面に出ていた。倫理学に関する書、カントの哲学書、等に接し、理解出来ないなりに頭を捻りながら、「人間とは何か」、「人間とはどうあるべきか」を問う機会を得ていた。頭に残った何かが、各人の後の行動の規範となっている筈である。心の文化の拠り所として、倫理・哲学は若者が避けて通れない科目の1つであった。しかしながら、教養部が廃止された現在では、哲学・倫理は前面から消え、更には基礎学力のトレーニングの場すら消失している。これに伴いこれからの社会の指導的立場の人のモラ

ル及び素養が大変心配される。

最近、自主性に欠ける学生が増えている。自主性が欠如した学生は、自分の意見を述べる事が出来ないため、必然的に集団的行動をとり自分の身を守ろうとする。これらの光景は授業中の教師からの問いかけ、あるいは学生実験においても通常見られる現象である。人間は生まれながらにして、各人固有の特質があり、それを伸ばすためにも、自分の意見を言葉あるいは文章で明確に表現できる必要がある。欧米人がはっきり自己主張することを考えるとき、日本社会の急速な国際化が進んでいる現状において、自分の意見を述べることは特に重要なことと考える。日本の高校教育に欠けている「読み」「書き」「発表」「聞く」といった共通する基礎能力を教養・専門教育において啓発し、「受信」型に偏重している学生の気質を「発信」型へ向けることを目的とした教育が、学生の能力を涵養する上からも是非必要である。教育を担当する者はその様な環境づくり、並びに学生にはその重要性を自覚させなければならない。

さて「教養教育」における化学教育の目的は二点あると考えられる。第一は化学に必要な化学的基礎知識の涵養、第二は化学の科学との係わりに関する理解を深めることである。化学は、徹底した実験・観察・考察を通して、化学的知識と科学的思考が始めて体得出来る教科である。それ故、化学教育にとって一方的な授業・知識の詰め込みは避けるべきであろう。即ち、実験と観察を繰り返し行うことによって化学的現象に興味を持たせ、それを理解する過程から科学的な判断力と思考力が学生に養われると考えている。どんなに諸産業の機械化が進んでも、教育には、最後まで機械化され得ない部分が多く残るべきである。手間をかけることは、心をかけること、人間を大切にすることである。教育にはいつまでも、手作りで、素朴で、人間くささが必要だろう。同時に、春秋に富む若者を啓発し、魅力ある化学の世界に身を投じてもらうよう、学生と教師の努力が必要である。

上記の理念の基づき「教養教育」に全力を尽くして来たつもりであるが、やり残しの部分があるのは残念な事である。私には「教養教育」に割く時間も機会も既に無く、次世代の教師に委ねることとなる。しかしながら、近年特に、教師は長時間一つの事に集中出来ず、椅子の暖まる暇の無い程教育・研究以外の仕事（雑用？）に振り回されている。本来、大学人のエネルギーの向くべきベクトルは研究と教育である筈だが、現在、大学の評価機構に過敏に反応している。「教養教育」の大切さを実感しつつ、実りある「教養教育」の見直しを切に願うところである。